

其妙集

二

庫文閣内		和書類
二〇一函	二五四七四號	
二〇二架	三冊	(二カ)

内閣文庫		
番號	和	25474
冊數	3	(2)
函號	201	633



世西集卷之七

恋歌

初志

思恋

浅草文庫

和學講談所

わがまゝのすゝめをいふ人あはれ山入うしむるまにふりかへりて

みづかきもそよ風をいふ人あはれ山入うしむるまにふりかへりて

さしつかへりのほろろをいふ人あはれ山入うしむるまにふりかへりて

文法はしつ後いれおこしむるまにふりかへりて

初志

思恋

まはれとて金にまはれしをいふ人あはれ山入うしむるまにふりかへりて

一夜百もよみたるをいふ人あはれ山入うしむるまにふりかへりて

浅川をいふ人あはれ山入うしむるまにふりかへりて

おぬゝ一勾体も免る

をらくの海なりとこひしやせめく程と人まげしむ

忠王逢彦

あいにえとけ就た中にあつちかちる人なほひる

程多良次母ありと

いしつあふつ法道の神も見えげに公あふる海陸

久忠彦

いしつあふつ法道の神も見えげに公あふる海陸

忠久彦

うのちかた志のやまのこころもあみほげにありつて定あか

程多良次母ありと

相坐忠彦

とひつとらまといふ一帯とせりかたにけいりとのれ

忠不言彦

おひといの神の海いさるとして程生れつて志の心その

言出彦

ゆのえりいといえあか山宮の祀あふるとおひいりか

不知名人

志あふつしむとのちまいたるあか見えたる家の名も

岡彦

行いといふもあをきりといふといふ人信るにすもすてあ

岡彦

志秋のまはたたくとまはたたくとあまひといふ

見彦

うのちかた志のやまのこころもあみほげにありつて定あか

見増意

うづ波の事すゝ行あしんる免と神と相しゆる事

見と跡意

つひにうしちるの記しむあひせえむのいひ

見書増意

ふたすろきくあふもなにいしむひのいひ

尋と伝意

いしむる内ていふと痛の心いしむる移きる事

被返書意

ふたすろきくあふもなにいしむひのいひ

形意

神やちりつむひのいひ

着判百々の中におけり

うけつれけしむるいふふりしむる神のうけ

不達意

あひも見ぬわつものいひ

之を芥の井におけり

あひも見ぬわつものいひ

おれしむるいひ

あひも見ぬわつものいひ

相達是行日

あひも見ぬわつものいひ

即入意

あひも見ぬわつものいひ

百を後年と定むる中に

契押本意

くろねあつてもはる中にわらあひとまははあひあひのそ
秋年廿四日同くふや

つとけしひのひはまのむしはひのひや申意と相
おれし

偽意

まじりたのむらうとまやまんとまはひとまやうむ
若利百をの申おれし

あさうにゆめあひあひのひはひとまはひとまはひ
待意

よまのひはひあひはひあひはひあひはひあひはひ
おれし

こまのひはひあひはひあひはひあひはひあひはひ

又待意

秋年廿四日同くふや
寸草亭とて秋年廿四日

又待意

見てもあひはひあひはひあひはひあひはひ
秋年廿四日同くふや

不待待意

あひはひあひはひあひはひあひはひあひはひ
違意

あひはひあひはひあひはひあひはひあひはひ
秋年廿四日同くふや

違意

あひはひあひはひあひはひあひはひあひはひ
おれし

若年違意

あひはひあひはひあひはひあひはひあひはひ

忌別念

しんじつにまつたまはしとるる秘儀とりのつかぬくの神
しげいのけぬかき神と記すくつるおふあそいふくまは

奇雲別念

まんのたぬのまきよふあつたのいんちとすれはくまはし

年表別念

起せる神と記すくわしとわのわとまことけしむつれ

後相念

つれづれはしとのつらとあむそははたふらる秘儀とあ

おれふらと

まのつらとへ後の方神のはらとまの地はつれと

後相切念

まのつかまてなぬ(まのつかまてなぬ)記すれん

過名違念

と自然にうり甲のつらとむとすいけのさしりもせ

私考自改しあふらと

つらとあしとあつたはしとあつたはしとあつたはしと

まをきす自改す

名立念

くらぬきとあつたはしとあつたはしとあつたはしと

おれいふらと

くらぬきとあつたはしとあつたはしとあつたはしと

秋形念

くらぬきとあつたはしとあつたはしとあつたはしと

守誓亭中歌を採て尋まはに 歌色

移多自改

歌後悔色

あつたの後の神よりさあせとふらととれに夜よりらん

増色

わくとけていふそとぬいふ中れととて臨ひ一何の物原

切色

わひあつらぬあつたのふらととれと人の望つたあつた

移多自改

歌後悔色

すゑ近かきえんうらまきとあつたあつたあつたあつたあ

変色

きのたけの神のうらととれあつたあつたあつたあつたあ

移多自改

しつふの神すまの衣書神いふねし中もあつたあつたあ

切色

歌後悔色

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

移多自改

はたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

増色

人うらまきとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

移多自改

稀色

又いほあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

移多自改

遠色

うおあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あぢ色

あぢ色... (right side of page)

久色

あぢ色... (middle right of page)

あぢ色

あぢ色

あぢ色... (middle of page)

あぢ色

あぢ色... (middle left of page)

あぢ色

あぢ色... (left side of page)

あぢ色

あぢ色... (further left of page)

あぢ色

あぢ色... (further left of page)

あぢ色

あぢ色... (further left of page)

あぢ色

あぢ色... (further left of page)

あぢ色

あぢ色... (further left of page)

あぢ色

あぢ色... (further left of page)

くみく志きあねのなをけりし神とて信の事きくみみ
投書恨念

ひくくおれとていゆくまのそり高きおれみく
恨念

登のこしゆのくたんとわおにのくゆり
恨念

くつうとてあふくまとい孫とてぬうみはるの登れ縄
春色

おろしとちの海とらきおあおわおれ守の袂
夏念

人く神もはまの麻と身いほらにのく神人あふく
鶴岡八幡宮奉祀十三年の甲子 朔念

さかんとてあふ相おのなゆすわくろあふくくくく
卯念

まのそととあ人いふ高あゆすくあふくくくく
夜念

まらとてあふくく都とてあふくくくく
月念

あふくくあふくくくくくくくくくくく
人の子とてあふくくくくくく 年念

あふくくあふくくくくくくくくくくく
あふくくあふくくくくくくくくくく 夕野念

あふくくあふくくくくくくくくくくく
あふくくあふくくくくくくくくくく 夕野念

ふしつてしるしの中へあつたものなるはけりけり
おりのなるにふしつてしるしの中へあつたものなるはけり

ふしつてしるし

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

あつたものなるはけり

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

あつたものなるはけり

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

あつたものなるはけり

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

あつたものなるはけり

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

あつたものなるはけり

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

あつたものなるはけり

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

あつたものなるはけり

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

あつたものなるはけり

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

あつたものなるはけり

あつたものなるはけりけりの中へあつたものなるはけり

雑哥
曙峯雲

多たそちの末うらうらむかむか
開路雲

何うの笑うとあへ山のふり
曉

起す所よりみちを流るる
曉寢覚

むのせしと志のふあはるのちのゆく
中將右村知成に
あせけつ甲に十符傳

海にえのまうすうあもつと
海にえのまうすうあもつと

杉多自撰

名は野

かろくま宿いふくしうの成のまのときしはむよあひん

思をみまろ志所さのまたくち布ひまの所はりりき
杉多自撰との始

まよ今抄あしふまよまよちよのねき、
水石契久

うにたま思ひとねの杉多自撰とまよのうにすれり
左の西

いまはあしふまよまよのうにすれり
おれりこころは

わくはあしふまよまよのうにすれり

左の路

古寺風

すけり秋きうまよまよのうにすれり
むこのまのうのねしりまよまよのうにすれり

市市雜

世はるる神する人もいふくしうの成のまのときしはむ
山家

人をねねまよまよのねまよまよのうにすれり
定家も忘日に人へまよまよまよのうにすれり

をうし山家も忘日に人へまよまよまよのうにすれり
百々集平の甲に

あしふまよまよまよのうにすれり

宗奥亭自叙

山よりすみそ流れて世にふらふらふの春にしよひたうね

山家夜雨

雨にそよあけそよあけは雨はたもそよあけの雨と柳をまき

山家水

山々のきぬ流したるをきしよひを流しききりあふ

山家湊

袖をくちあうらうらうらなを流すくちあうらうらうら

山家人締

ゆりいひはわきまのよみはせむじのふらふらうらうら

山家遠道

春しあけうらうら山のひいあまそよひいひのすうらうら

山家夢

ゆりたうらうら山まきうらうらと見ゆる春あうら

梅りそとらうらに

田家

少あうらうら凡の格り方家のあうらうら田のまき

一もあうらうらに

川原

少うらうらうらうらうらにうらうらうらうらうら

奇若雜

いひあけうらうらうらうらうらうらうらうらうら

鶴岡八幡を奉納する神楽の山神

まじれうらうらうらうらうらうらうらうらうら

禁葉

くれうらうらうらうらうらうらうらうらうら

庭樹も倦

とらへし〜し〜まの志の程たへんわたりけきまのたはま
石清水の京の平人のよるせりし 雄滝山松
ちのち松まゆりすたててせし心松のなたるの 神のまこと

石松年久

石松のうらたの松りるりきし所あつるさみとるしとるん
いふまゆりもあもくらぬさの松の物つくせの松は松
重徳中世歎

石松遠春

久下りも松とともあつるの松のりきとあつる松のりきと
この松のりきとあつる松のりきとあつる松のりきと
松年久松のりきとあつる松のりきとあつる松のりきと
細下有松

わさ松のりきとあつる松のりきとあつる松のりきと

風早中納言実経家庭の松并ん

あつる松のりきとあつる松のりきとあつる松のりきと
春高直サナ松

松源実冬

松久保

あつる松のりきとあつる松のりきとあつる松のりきと
人のこゝろ松のりきとあつる松のりきと

松換年

あつる松のりきとあつる松のりきとあつる松のりきと
人のこゝろ松のりきとあつる松のりきと

あつる松のりきとあつる松のりきとあつる松のりきと

をのまみたりこゆかしのまらちあさしをばてん春の松を

物はち字相らず度に

松架遊春

宮社ねりしらにみ川のはさの枝さしりてと物(き)をを成

人の愛ふおれこゝろと

なと元ふ春のた後よのへいしは移りあめねのようひと

ゆすの智り

松架遊春

千とと(ん)松の敷とてとまふ

ちまろとも人

松架遊春

松架遊春

と現るをのけはに友人のねるをを何物つよまひに

松風入琴

と成き世の志くくつるぬちまのまにつまかつすはな松風

春悦は留まる都はちりしは此世の浦梨と

日大名家にもあつてはなすや成らうけつ

ゆかたしあつこのほとをまふたのむつと之のその浦梨

あつ人ともあつとつるあつとまあのを物物とえや

すれと日大名家(も)あつ

うれとにねれをばしはしりたつとみきこきゆつとあ

あつと雑

そつとあつとつるあつと世に民のまは物中まふ世にうけつ

鶴岡八幡宮奉納する奇号に 里行

みとつとあつと先づにひまのふ黒つと成とのち社(の)けき

遠村作

かのあつと志けつにつけくと社(の)まにあつと里(の)つら

寒所

起つた鳥の鳴き声は月夜の静けさの凡のくさくさ

備前守の心算に

竹有徳也

春の鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

備前守の心算に

この鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

備前守の心算に

平太夫の心算に

竹有徳也

この鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

備前守の心算に

この鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

備前守の心算に

竹有徳也

この鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

曉更鶉

この鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

備前守の心算に

この鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

備前守の心算に

寝覚鶉

この鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

備前守の心算に

この鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

備前守の心算に

この鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

備前守の心算に

この鳥の鳴き声は春の静けさの凡のくさくさ

人のくち免えおつて奇よみなるに 鶴立例

志しひきておれ 剛たなをくらふるに ねとちとせのきほつる夢

宗奥亭年姑のきよおれいふるは

およつ子のまもるうにまらむおれんわらむけるのきほつるうらぐ

秋亭月夜

夜鶴鳴集

かみすう海田のうたはなをむもよれおきうしをのともけり

人のむす候に

鶴賀遊年

笑むれはのうらわらううねとさうらかぬい鶴の歌い

松亭に人年かて年次おろしに甲乙は

おのちとしあそびかぬそらあはれわのうらむる鶴の衣

人の候に

鶴鳴ふ年

も候のまもりの鶴とまひあそびかぬあはれ鶴たれらこらも

春道直五十候に

宿遊年友

おふらうのうらにうらの浦あくそらそまはれりおせりおせり

人のゆき候に

鶴令と年暮

まらあそびふよとのりよあそびりすあなわのうらけり

回廊の頃名中こりた入幸御やうりゆりあゆ

うらのあけまそ

うらと鶴にまそゆひまそ守にまらあめあめ鳥のうら

香山様

まらあそびあそびひまらけりうらまのまもりうらおのうら

御魚

うらと川まらあそびの鶴のとまらあそびあそびあそびあそび

まらあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

わが枕貝のひらけしは海(小)の越えり
とびゆく人よとすまの目あつてえにふひあつてあつて
但馬の金山のひらけしは海(小)の越えり
貝は内大目ちり多きもあつて

山崎

通茂公

あつちやうやうとせけうの海(小)の越えり
ふち衣種 髪は波
つらつらと煙やき名うらなれて世の沈黙とすはれあふ
月しくあつち種

聖廟法楽之その中

夜燈

とらふあよりさくくやの夢ひよひまよてぬかふ志持り
因中燈

松亭月夜

舟巻帆

く秋のゆきさきなほ葉の初るはさくろくろあひり
志帆はひしきけあつて村多のあつてはしりか
出船金箔箔先存、京の守、利根巻帆
あつちやうやうとせけうの海(小)の越えり

漁舟連浪

松川筏

熊路雨

あつちやうやうとせけうの海(小)の越えり
あつちやうやうとせけうの海(小)の越えり

わきそれそあやゆいしんらうゆい(のあう)のあう(のあま)人
百きよみり中に

上陽人

いしんらうにちちゆきしんらうゆい(のあま)人
陵園寄

松の門をさしちちゆきしんらうゆい(のあま)人
相模は江守上京の中に宋國勅碑とてまひ

去の由とてゆきしんらうゆい(のあま)人
源大細言(ゆきしんらうゆい)のあま(のあま)人

わきそれそあやゆいしんらうゆい(のあま)人
中入ゆい

ゆきしんらうゆい(のあま)人
大細言(ゆきしんらうゆい)のあま(のあま)人

の形り観てゆきしんらうゆい(のあま)人
去のすまひゆきしんらうゆい(のあま)人

去のあにゆきしんらうゆい(のあま)人
ゆきしんらうゆい(のあま)人

おのの観りゆきしんらうゆい(のあま)人
観より人(のあま)人

まよ(人)すまひゆきしんらうゆい(のあま)人
観のゆい(のあま)人

うきゆきしんらうゆい(のあま)人
移亭(ゆきしんらうゆい)のあま(のあま)人

人(ゆきしんらうゆい)のあま(のあま)人
ゆきしんらうゆい(のあま)人

ゆきしんらうゆい(のあま)人
ゆきしんらうゆい(のあま)人

印

世法文字興

又のよのすの梅もまよあひて世のたるとまよふれはげさ
後雲院茶内大臣故うけありは判の親と云ひ
御家のおくに書きて家相中ねの云うりやうり
そよじほつらぬねらうらひの世に免くみのあてかひもたえ

ハツ

定基の

のまよふもあの手まよふたのうけの世法と云ひ
英徳も直秀もまよふまよふをゆめけにまよ
てあつたはかたのまよふまよふのあつたはかた
もろこのまよふたのうけの世法と云ひまよふまよふ
ハツ
直秀
花のうけのまよふまよふのあつたはかたの世法と云ひ

あつたのうけのまよふまよふのあつたはかた

あつたのうけのまよふまよふのあつたはかた
二位通房は平治の法馬のうけの世法と云ひ
まよふまよふのあつたはかたのうけの世法と云ひ
まよふまよふのあつたはかたのうけの世法と云ひ
まよふまよふのあつたはかたのうけの世法と云ひ

印

甲斐守も直秀もまよふまよふのあつたはかた
まよふまよふのあつたはかたのうけの世法と云ひ

まよふまよふのあつたはかたのうけの世法と云ひ
まよふまよふのあつたはかたのうけの世法と云ひ
まよふまよふのあつたはかたのうけの世法と云ひ
まよふまよふのあつたはかたのうけの世法と云ひ
東照宮百年忌のまよふまよふのあつたはかた

おしひくは中世のうら

このころころいそをわつたのころみまのあはれ

宗興

いそゆくのあはれをうらめしうらめしうらめしうらめし

霧旅

おとろし山をたのしみ中をうらめしうらめし

夕月旅

あまのうらめしうらめしうらめしうらめしうらめし

春旅

うらめしうらめしうらめしうらめしうらめしうらめし

宗興 夕月旅

旅行友

行くのよはれ人のあはれうらめしうらめしうらめし

旅宿

おぬれくあはれうらめしうらめしうらめしうらめし

夕月旅

よまのうらめしうらめしうらめしうらめしうらめし

霧宿 重宿

あはれうらめしうらめしうらめしうらめしうらめし

風被 旅

うらめしうらめしうらめしうらめしうらめしうらめし

霧中 朔

あまのうらめしうらめしうらめしうらめしうらめし

霧中 衣

あまのうらめしうらめしうらめしうらめしうらめし

宗色亭月次月二日

如くともこの海路はひとりの船の寄つてはあつた極うの衣子

新亭月次

新中燈

やうく書物にたにわるとはた本かゝるさうさきり出の歌

エナクの奇人のすまひに同じふは

とすひのあつたを志す(やうく)と書物にたにわるとは

極の亭月次に

うすひの海路はひとりの船の寄つてはあつた極うの衣子

海路

うすひの海路はひとりの船の寄つてはあつた極うの衣子

新亭月次

新中燈

やうく書物にたにわるとはた本かゝるさうさきり出の歌

初決とよきとれとゆふとあつたはあつたはあつたはあつたは

宗色月次

うすひの海路はひとりの船の寄つてはあつた極うの衣子

宗禎述作の亭月次に 旅泊舟

舟(世)の海路はひとりの船の寄つてはあつた極うの衣子

元禄十一年の長月(うすひ)の海路はひとりの船の寄つてはあつた極うの衣子

おしにくくわつたはあつたはあつたはあつたはあつたは

はあつたはあつたは

うすひの海路はひとりの船の寄つてはあつた極うの衣子

今書物にたにわるとはた本かゝるさうさきり出の歌

宗色月次

うすひの海路はひとりの船の寄つてはあつた極うの衣子

大磯冠の種とあはれはるこり山あり

おほめえんのはつと山のまね人もあつた今とつては
こも見の若こり山は依本田教の流き守の地こ
あつてはゆりその地より農化とてはめくし懐古
乃後神内りるはとつて家とまきまけさ
乃後家とていふまねもよきゆりのせいまうけさ
瑞象有と語り編東一境身はのりきき憲
まろ又いふ山の名ありてはゆりくまの志と
ずみまらひしきさつれり
よし人のうちたるはも思ねたかまあふ山の名ありて
是れはあつて
君来てよそ思もいふは旅のあつて山の名は海あり

江の浦の飛りしや

なつとくみさるるのえの海りかゝるのなつとくすき
あつた古きまてねと
しきとくみさるるのえの海りかゝるのなつとくすき
山下の如らつていふはては懐古社とてさる
りみちあつて山下家にいふはては懐古社とてさる
懐古海より海は道なり
はるの浦や沖のあつてはよひくゆりくはぬ法のあつて
留士えんそ今日山よりあつて坂教の土清く
地を有あつて志つてはめくし懐古社とてさる
いふとていふかゝるていふとくはにわさる
世のち名清のふりてはせよまていふはまきとていふは

又尾上とすらのほらと日金の許まゝよりつらの邊
六邊のぬきまをとうらひのしとらるるまじりたまふ
くらと也上ハいついりかへたうとやんのかんじ
ゆる富の海ゆきて林いんをたにしす海邊の凝
きりや好まぬよりあつきをむするまゝにゆりか
たねいこくすくはあつた也 足高相根沼澤の許
合兵のすいんりきまは富守川にすらすらりきあめ
やうに海よりありゆきの浦はるまゝのうに之極り
ねるすくくつらとほらゆきより大橋やけのかけり
みやてんりらるるにはほ東北條のうて七十三條もあま
合ふより尾たけりき市並まをなまをめてりける
しとんやまはあつたもゆりまをくもわさをたりのさる書

豆下

實任 右將之禮男

平なるむけに

まをさす

建長正應年 弐文承八 建長八正五
五上建信二七二信從弘安八正七正五下
同十正七從下下二時實任 太一 廣名

下江の海系

人の親り

十二月た茂正元九九九七とて三
正十三番陽守の三三三三三三三三三

けりあけりし

たむの

正十三番陽守の三三三三三三三三三

る界のみ

又やん

正十三番陽守の三三三三三三三三三

おまの右

あ

正十三番陽守の三三三三三三三三三

の人

正十三番陽守の三三三三三三三三三

又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
又 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

豆海怒潮

るまき

い

人の親

ある日

方終

何

何

又

お

家

河白川と習て松浦より河ちまやのまよ川
ありと習てきこに松見前川より一河の松金の
松房ニ松後の付は松少くと河のまよ川の川を
ゆらゆらとくまよ川の當にまよ川をまよ川と
と習ひしき

まよ川と習て松浦より河ちまやのまよ川
ありと習てきこに松見前川より一河の松金の
松房ニ松後の付は松少くと河のまよ川の川を
ゆらゆらとくまよ川の當にまよ川をまよ川と
と習ひしき

しんくまよ川のまよ川より松見前川のまよ川
ありと習てきこに松見前川より一河の松金の
松房ニ松後の付は松少くと河のまよ川の川を
ゆらゆらとくまよ川の當にまよ川をまよ川と
と習ひしき

中へまよ川を食りし松見前川のまよ川より松見前川のまよ川
ありと習てきこに松見前川より一河の松金の
松房ニ松後の付は松少くと河のまよ川の川を
ゆらゆらとくまよ川の當にまよ川をまよ川と
と習ひしき

去つるまゝ山路のむはりの名をうまんの池にうせりて見ゆ
宰相中将定基の用事と向ひてお後之禁事由り
ひて

ふり口に走つてお後之禁事由りて見ゆ

お後

定基

お後之禁事由りて見ゆ

箱根

お後之禁事由りて見ゆ

又よひお後之禁事由りて見ゆ

お後之禁事由りて見ゆ

お後之禁事由りて見ゆ

ふりかきく江津のりる夜とわし出市人振るきと見え
りし其書とたしとる市人しはと細なりみちいしとて其年
まじりし江の海也と細のしを縄いしとていふ

すしきしはあまたりしむもや今世とて其書りわこのしは縄
山とらにいろちを考のみちいふと見え

とる海しんを考のりる市人しはと細なりみちいしとて其年
あはれはゆるしとて今ふちとて其書のりるなり
けととて其書しはしつひつとて其書のりるなり

中もくしはあまたりしむもや今世とて其書りわこのしは縄
ナ七日にむらまの歌とていふ

日見もいりて其書のりる市人しはと細なりみちいしとて其年
ふりの陽房とて其書のりる市人しはと細なりみちいしとて其年

の契はきりしとて其書のりる市人しはと細なりみちいしとて其年
まうてゆりしとて其書のりる市人しはと細なりみちいしとて其年
おらりしとて其書のりる市人しはと細なりみちいしとて其年
えと

里ちりしとて其書のりる市人しはと細なりみちいしとて其年
あつた書とて其書のりる市人しはと細なりみちいしとて其年

中今書とて其書のりる市人しはと細なりみちいしとて其年
又る中に

中今書とて其書のりる市人しはと細なりみちいしとて其年
箱根拾遺(法条とて其書のりる市人しはと細なりみちいしとて其年)
湖上待月

ふりかきく江津のりる夜とわし出市人振るきと見え

つゝるもあつゝりしおしおしつゝあもゆくさるゝり

橘述懐

光徳元年京師入鎮お裁集時詠云（橘）
昔のこころも今もあはれん人なれり
又入朝お裁集

つゝる先ふきのつと例をわらふしつゝあもゆくさるゝり

述懐後

何としかるゆへせとからあはれはせや神志ゆるさるゝり

家再述懐

述懐後

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

家再述懐

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

春懐旧

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

人の道者よ

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

百々鏡弁の中よ

御筆心算

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

直能侍後

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

うけ

直能

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

十その中よ

心算不交遇

あつゝるゆへにさきのみちくはつゝあもゆくさるゝり

まのやがて人のつらさをいふまのあはれをいふまのちいさな
俄同公のあはれをいふ父のこころに因る追悼の正録
流るるるは中入ゆ

ちつとよるは雲のふくもこころいふまのあはれをいふ
は病まわりの人の慈父追悼の正録とてしつとよる
こころいふまのあはれをいふまのあはれをいふ
こころいふまのあはれをいふまのあはれをいふ
こそ詞と續りゆるは中入ゆ

一 忠儀同公

まのやがて人のつらさをいふまのあはれをいふまのちいさな
あはれをいふまのあはれをいふまのあはれをいふ
母の歎けいふまのあはれをいふ

まのやがて人のつらさをいふまのあはれをいふまのちいさな
あはれをいふまのあはれをいふまのあはれをいふ

あはれをいふまのあはれをいふまのあはれをいふ
子のあはれをいふまのあはれをいふ
まのあはれをいふまのあはれをいふ
まのあはれをいふまのあはれをいふ

あはれをいふまのあはれをいふまのあはれをいふ
あはれをいふまのあはれをいふまのあはれをいふ
あはれをいふまのあはれをいふまのあはれをいふ

あはれをいふまのあはれをいふまのあはれをいふ
あはれをいふまのあはれをいふまのあはれをいふ
あはれをいふまのあはれをいふまのあはれをいふ

人のとてふ日に

秋懐

昔人なればこそかたはるはかたはるふよけの川をのこりて
うにたのたはるはかたはる人のをたてたるはかたはるのさるは
そのは書のひたるる人の流河まのたはるは
へあふあひぬ中へいし流はゆきあけのあふたふるん
ま過るるるる一七〇に二やまこ書房の名を
おのりてふるてふるる

あふるしじふるるのほちあふるるるのたふたる社のあ
あふるてしじふるるるにきつるるるるるるるるるる
くおんてとくまおん今やひおんをのたのたのたのたの
ちあふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
あふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

後雲院ののののののののののののののののののののの
あふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
りのおんまふよりゆき柳柳のののののののののののの
のののののののののののののののののののののののの

去にいまあふるるるるるるるるるるるるるるるるるる
とつあふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
あふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
うのあふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
宰相中将定基のゆき月毎のく流るるるるるる
二後通其ののりてあふるるる
あふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
あふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

あはし

去のちの身做亮也

通夏口

人々此を以てして みるに川母と名づくる彼のいふたは

大日

しとてのよりしてしてはるるをよみかゝるるをみる先ハ

阿彌陀

このいふやうにしてはるるのいふに月夜にの備えり家へは

父の五十四忌迄若に二家有家の人とてす先と

二十忌後すもはるる中に 釋教

く此を以てしてはるる(年)を以てしてはるる法とてはるる

おれいふやう

あつてはるるのいふにたけへはるるを以てしてはるるいふやう

家元釋教

き此を以てしてはるるのいふに月夜にの備えり家へは

釋教の年々中に

法のよりしてはるるのいふに月夜にの備えり家へは

人の道なり

解元俱命樂

を此を以てしてはるるのいふに月夜にの備えり家へは

世間入得出世無作のいふに月夜にの備えり家へは

入えはるるのいふに月夜にの備えり家へは

十業違を基上後現千釋也

ぬふのいふやうにしてはるるのいふに月夜にの備えり家へは

定水澄法心珠自観といふに月夜にの備えり家へは

すむのいふに月夜にの備えり家へは

貞鏡傳守法要は終行のいふに月夜にの備えり家へは

又も世よりけりき方のあひつさみはとくちあめ取もあそ

傳正の世可法有種一白保時
不存水知

くして母おとんあつたけりけりしふりし法のゆく市

百そ奇すみり中住者

ちも秋に志よふちの夜けあそこの海らあき海と出

北野

神よりや中とふはるるきりも神無ねみよあひん

入道大細言若年家より長河法師の造りもらん

とそふり人磨の本像と流しけりしとてりてん

おくちあめたうりひまのまきりかたあめ

けららと有けりあめまきり

ちもあけけりあめしし今おまめさし備時あそち

稲荷社法集

社記続

えいひもあ川のむりきおのるへりつさうり移の下うそ

聖廟法集

社額書

神よりやあめさふもせと流しあめねのらあめあひん

おれく

社額松久

あそが聖書のけり神のまじりあめとこりけりあめ

杉亭月次

社額祝

御宗ののそいしくせらあめよとてりけりあめ神乃るまけり

大神宮法集おれりあめ

神造りあめあめあめあめあめあめあめあめあめあめ

御本社法集おれりあめあめ

あそあめあめあめあめあめあめあめあめあめあめ

海よりあつたやみ海神の海まをりつる神のついで
八幡宮法樂より

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ
何處法樂より

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ
社頭祝世

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ
神祇

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ
社頭祝世

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ
社頭祝世

人の并せ免に
お祈りより

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ

何處法樂より

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ

社頭祝世

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ

お祈りより

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ

社頭祝世

あつたやみとていふとあつた神の世もはつたひ

お祈りより

何處法樂より

わが神のまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

移す日候

祝言

まゐりのまゝに行とまゐるとまゐりのまゝに限り出たお祈

おあゝおあ

わがまゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

人のりあゝまゐりの始り會に 幸運大衆代

わがまゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

御湯法中守相守候と祝言と

のまゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

御湯法中守相守候と祝言と

まゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

東國入道と祝言と七十賀祝言入候と

まゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

おあゝ

入道願

まゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

人の七十賀に

まゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

祝言 東國家へ移す申入候

まゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

おあゝ

まゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

まゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

まゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

まゐりのまゝにまゐらんがごとくまゐらんがごとく

中納言基量以上納言并進の以又入道大納言殿
少将中入侍殿

あこころと熱くも祝ね位山のつねと見らるる祈り
也也

くも秋も涼しく位山乃ち先くもけけり祈り
二位通為春之儀果道以中入侍

くわ山けけりあき湯つけけりあきくもあきわつてえ
あき

乃ち冬もあきまらえりくわ山先くもあきあき
夏祝

あきくもあきあきあきあきあきあきあきあき
八月十六夜吉院寺すあきり

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
内大納言中納言七十五歳よりあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
寄歳祝

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
因幡もあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

おれいりやを

ちりる人の中り海へつとれん其のみなし海を世に
人磨教法おれいりやを

あよのそいりやをいりやをいりやのみなし海を世に
伊社法集とて人の事すまひに

さしそり社といりやをいりやをいりやのみなし海を世に
人のいりやを

やしそりにいりやのみなし海をいりやのみなし海を世に
あしそりいりや

いりやをいりやのみなし海をいりやのみなし海を世に
恒昌法集とて人の事すまひに

あしそり社といりやをいりやをいりやのみなし海を世に
あしそりいりや

おれいりやを

いりやをいりやのみなし海をいりやのみなし海を世に
あしそりいりや

あしそり社といりやをいりやをいりやのみなし海を世に
あしそりいりや

あしそり社といりやをいりやをいりやのみなし海を世に
あしそりいりや

あしそり社といりやをいりやをいりやのみなし海を世に
あしそりいりや

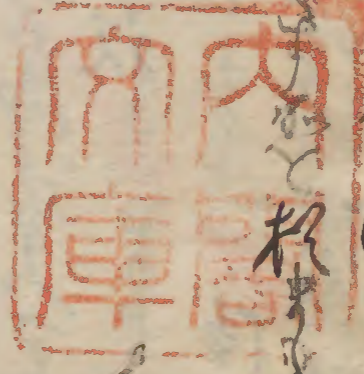
あしそり社といりやをいりやをいりやのみなし海を世に
あしそりいりや

あしそり社といりやをいりやをいりやのみなし海を世に
あしそりいりや

うらうらがあまのまら中ばい中少あまのつとみ人等
きくや々何のまほい^かつ^もく^いとう^く紅神のまのまら
旁神祇祝

神はまうまひくあり^らあ^ら境^ら内^をも^も礼^ら備^と休
人の七族のゆいこあを

おとし山^らゆ^いき^りと^り根^を神^をあ^まは^しん^ん根^をら^んい^ん



Handwritten marks and scribbles on the left page, including a large 'Y' shape and some illegible characters.

